

平成30年度第1回四街道市総合教育会議議事日程

日時：平成30年8月24日（金）

午前10時30分から

場所：市役所第二庁舎第2会議室

- 1 開 会
- 2 市長挨拶
- 3 協議事項
 - ①外国語（英語）教育の推進について
 - ②外国にルーツを持つ児童生徒支援体制について
 - ③その他
- 4 閉 会

平成30年度 第1回四街道市総合教育会議会議録

日 時 平成30年8月24日（金） 午前10時30分～午前12時25分

場 所 四街道市役所第二庁舎第2会議室

出席者 市 長 佐渡 齊
教 育 長 高橋 信彦
教 育 長 職 務 代 理 者 府川 雅司
委 員 田中友季子
委 員 須郷 恭子
委 員 小舘 修

千 葉 大 学 名 誉 教 授 新 倉 涼 子（学識経験者）

出席職員 教 育 部 長 荻野 武夫
教 育 部 次 長 濱田 宗孝
教 育 総 務 課 長 伊藤 克紀
学 務 課 長 沖永 寛
指 導 課 長 秋庭 行雄

傍聴人 3名（男性1名 女性2名）

開会宣言

市 長

○**教育部長** それでは、定刻になりましたので、平成30年度第1回総合教育会議を始めたいと思います。

はじめに、佐渡市長よりご挨拶を申し上げますので、よろしくお願いいたします。

○**市長** 皆さん、こんにちは。市長の佐渡です。本日は、お忙しい中、四街道市総合教育会議にお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

本年度第1回目の会議を本日開催する運びとなりました。平成27年からこの総合教育会議を開催させていただいておりますが、これまでに小中学校へのエアコンの導入、千代田中学校大規模改造事業、また小中一貫教育における四街道市の英語教育などにつきまして議論をいただきました。教育長や委員の皆様と忌憚のない意見交換ができますことは、四街道市の教育行政を進めていく上で重要な役割を果たしているものと思っております。

皆様方ご承知のとおり、市長部局、市長といたしましては予算の編成や執行、条例の提案などの権限を持っております。しかしながら、市長は4年に1回選挙がある政治家ですので、どうしても政治的な動きになってしまいますが、教育はまず政治的な中立性が必要であり、また継続性が必要

だと思えます。継続性が求められるとともに、安定的に持続的な維持がされなければいけない。政治的な中立を保っていらっしゃる教育委員の皆さんと意思疎通を図ることが重要だと思えます。

ですから、常々私は、四街道市の教育の内容、あるいは教育現場における人事等については、市長として立ち入ることはいたしませんという姿勢をお示ししています。この総合教育会議で皆様方と意見交換を行うことで、あらゆる面から協議、検討を重ねたいところですが、教育の内容あるいは人事と先ほど申しましたが、そこに踏み入る考えはございません。今後の四街道市の教育について、よりよい方向性を見出していければと思っています。

また、本日は協議事項の中で外国にルーツを持つ児童生徒支援体制について、千葉大学名誉教授の新倉涼子先生にお越しをいただいております。後ほどご説明を賜ればと存じます。よろしく願いいたします。

それでは、皆さん、本日は盛りだくさんですが、ご協力を賜りながら、闊達な意見交換を進めたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

○**教育部長** ありがとうございます。それでは、この先の進行につきましては四街道市総合教育会議運営要綱第3条におきまして、会議は市長がその議長となると規定しておりますので、市長にお願いしたいと思います。

市長、よろしく願いいたします。

○**市長** それでは、平成30年度第1回四街道市総合教育会議を開催させていただきます。

協議事項の①、外国語、英語ですが、外国語（英語）教育の推進について、これを議題といたします。四街道市では、新学習指導要領で示されました小学校における外国語教育について、昨年度より旭中学校区の小中学校を四街道市英語教育モデル校に指定し、小中一貫教育での系統性を持たせた英語教育を推進していますが、はじめに外国語教育の推進について皆様と意見交換をしたいと思えます。

それに先立ち、まずは事務局から現況について報告を願いたいと思えます。

指導課長、どうぞ。

○**指導課長** 指導課長の秋庭です。私から、本市の外国語、英語教育の現況についてご報告いたします。

まず、四街道市教育振興基本計画において外国語教育推進を掲げ、小学校では体験的な学習活動等を通じた外国語への慣れ親しみ、中学校では聞く、話す、読む、書く、この4つをバランスよく高めながら実践的な英語力の育成を図り、社会のグローバル化に対応できる人間形成を目指すとしております。続きまして、外国語教育推進の現況です。昨年度より旭中学校区の各小中学校を英語教育推進モデル校に指定するとともに、外国語教育に造詣の深い教職員等で構成する外国語教育推進検討委員会を立ち上げ、小中一貫教育の視点から義務教育9年間を通じた連続性のある英語教育のあり方について準備を進めております。

モデル校のうち、4小学校については平成30年度、31年度の2年間、文部科学省より教育課程特例校の指定を受け、英語科を新設し、小学校1年生から読む、書く、話す、聞く能力教育をバランスよく育成する英語学習に取り組んでおります。この4小学校については、市雇用ALTのほか

モデル校専任ALTの派遣及び県から加配された英語専科教員を配置するとともに、リズムに合わせて楽しく学習を進めることのできる教材を全児童に配付しております。また、学級担任がALTや英語専科教員と連携し、自信を持って授業を行うことができるよう、モデル校教員対象の合同研修会を実施し、効果的な指導方法等の共有に努めています。現在のところ、4小学校とも順調に研究実践が進んでおり、児童もきちんと学習に取り組んでおります。

モデル校以外の小学校につきましては、小学校3年生から6年生が文部科学省から示された新学習指導要領実施に向けた移行措置に基づいて、外国語学習に取り組んでおります。モデル校の実践を市内小中学校で共有し、指導に生かすため、市主催教職員研修会において小学校教員を対象にモデル校で使用している特色ある教材を活用した指導方法について学ぶ機会を設けるとともに、小学校全教員と中学校英語科教員を対象に、モデル校4小学校の授業参観を計画的に実施しているところです。教員の英語授業力向上を支援する取り組みとしては、夏季休業中に希望する教員を対象として市雇用ALTとともに英語を使って活動する中で、言語運用能力の向上を図るサマーキャンプやクラスイングリッシュ等を学ぶイングリッシュショートプログラムを実施しております。また、今年度は外国語教育推進検討委員会において、四街道市英語科学習指導要領の作成に取り組んでいるところです。

以上です。

○市長 ありがとうございます。今、指導課長から四街道市の英語教育のモデル校の現況をご報告いただいたところです。委員の皆様方、今の説明に対してご意見等あれば賜りたいと存じますが、どなたかいらっしゃいますか。

須郷委員、どうぞ。

○須郷委員 今の説明を聞かせていただいて、モデル校4校がとても楽しく英語教育を受けていることを知り、大変うれしく思います。

○市長 田中委員、どうぞ。

○田中委員 昨年度吉岡小の1年生、6年生の英語の授業に参加させていただいたのですが、初めての年だったので、6年生はすごく緊張するというか、慣れ親しむのがうまくいかないの、ぎこちない感じだったのですが、1年生は最初からALTの先生と仲よく自分たちのペースで話す、聞く、乗りに乗りながら英語に親しむことができているので、低学年のうちから英語になれ親しむことは大切だと実感いたしました。

○市長 高橋教育長、どうぞ。

○教育長 今までの小中学校のつながりを考えますと、小学校では英語になれ親しむ、楽しく活動を行っていくのですが、中学校に入って英語科が始まると、単語を覚え、書かなければいけないというギャップが今までありましたが、小学校のうちからその学年に応じて聞く、話すだけではなくて、読む、書くという活動を取り入れることで今後中学校英語と非常に滑らかに接続していくので

はないかと期待して実践しているところです。どうしても単語を覚えなさいといけな、書かなければいけない。単語を覚えたものをまたテストでやらなければいけないというプレッシャーがありますので、小学生から段階的に行うことで、プレッシャーを余り強く感じないように、英語の授業へつなげていけるように現在やっているところです。

○市長 小学生時代は、英語が楽しくて、好きな子が多いのですが、中学に上がったら英語が嫌いになってしまう子がいっぱいいます。それが今までの日本の英語教育のような気がしていますが、今の四街道市のモデル校ではその子たちは中学へ行って英語が嫌いになることはあり得ないですか。

○教育長 研究が始まったばかりですので、それを目指して今各小学校でやっているところです。

○市長 これまでも例えば英語の研究校とって大日小とか、学校でそういう研究活動をやっていましたね。そういう子どもたち、小学生時代を見ていると楽しく英語やっているのだけど、中学へ行ったら英語が嫌いだと、よく四街道市議会でも中1ギャップなどあるのですかと主張される議員もいますが、英語教育は中1ギャップのいい例だと思いますね。私たちの時代は英語ができないと、高校、大学入試なんかで一生懸命単語を覚えたり、文法を覚えたりと余り好きではないような印象が残っているのです。

○教育長職務代理者 教育課程特例校を本市の教育委員会が申請して、旭中学校区、小学校4校が特例的に教育課程を編成して実施し、1年生から英語を勉強する。教育委員会の取り組みとして積極的に新しい学習指導要領に対応していくことは組織として必要だと思います。1つのモデルとして、旭中学校区でやり、今後は、私の考えでは2年間で、少しずつ下地ができてくると思いますが、それをしっかりと検証していくことが必要だと思います。先ほど市長のお話でありましたが、教育は安定性と継続性が必要だと思います。特に継続性をどうしていくかが旭中学校区のこれからの課題にもなるし、四街道市の学校の課題になると思います。そう考えると、この2年間の取り組みの成果がどのように他の4中学校区に啓発されていくか、市の教育行政を推進していく重要なポイントになると思います。

指導課長の先ほどの説明にもありましたように、小中一貫教育の中で生かしていく。ですから、今の市長のお話のように、中学生になった段階で、小学校のときに身近で楽しんで会話等々をやっていたのが、中学校になったらどうなるのか、そのあたりを旭中で検証しながら取り組んでいくことが必要ではないかと思っています。

○市長 私も昨年吉岡小の授業の様子を見に行ったのですが、子どもたちは本当にすぐ適応して楽しく授業を受けているのです。その子たちが、中学へ行っても英語が嫌いにならないような子どもたちに成長してくれるのではないかと、今大きな期待を持っていますが、吉岡小の授業を見ていて、一番思ったのは、子どもたちはどんどん適応しますが、先生方は大丈夫かと感じました。中学校は英語専科の先生がいらっしゃるからいいですね。でも小学校はこれから担任の先生が教えるのですよね。担任の先生は英語は大丈夫かと。私がたまたま伺った吉岡小の担任の先生は学生時代英語を

勉強されていたという印象で、かなりスムーズな授業をされていましたが、ほかの先生はそうとは限らないですね。その辺りの検証はどうなるのですか。

○**教育長** 確かに市長がおっしゃるとおりで、小学校の教員は教員養成課程で英語科を一切やっていません。現在もそうですが、英語科については小学校の教員養成課程には一切ありません。ですから、現場に来て、さあ英語やれと言われても、適応できる方もいますが、適応できない方も多く、そこが教育委員会として支援していかなければいけない部分だと思います。

○**市長** 文部科学省においても、平成32年度から新学習指導要領で担任が教えるわけですね。小学校においても、中学校みたいに英語専科の先生を設置するなどの動きはないですか。

○**教育長** 学務課長が担当です。

○**市長** では、学務課長、その辺りは文部科学省の動きはどうですか。

○**学務課長** 今年度から四街道市内にも英語専科の先生を1人入れております。

○**市長** 小学校に入れているのですか。

○**学務課長** はい。今後もその予算を増やしていく考えは国の方で持っております。四街道市においても、英語専科を一人でも多く配置できるよう、北総教育事務所にも働きかけ、来年度は一人でも多く英語専科の先生を入れられるよう務めているところです。

○**市長** 今年度、四街道市に小学校受任校で英語専科の先生が1人配置されましたね。それは四街道市に限らず、千葉県下1市に1人という感じで千葉県教育委員会が派遣、配置しているのですか。

○**学務課長** 今、正確な予算の額は申し上げられませんが、何億という予算が昨年度配当されました。また、県の中でもその割り当てが来ておまして、昨年度は急な話だったので、見送った市も多かったですが、四街道市の場合は特例校でしたので、いち早く手を挙げて申請をして1人配置することができました。次年度においても、今考えているのはALTの経験を持つ教員に特別免許状を与えて、その方に英語専科になっていただき、四街道市に配置してもらうことを県に相談しながら進めているところです。

○**市長** 高橋教育長。

○**教育長** いずれにしても、四街道市では、12校あるところに来年度は多くて2名の配置になり、絶対数が足りません。その足りない部分はALT等で補完していかないと、特に小学校の教員が潰れるようなことになっては困りますので、小学校の教員が意欲的に、前向きに教育に取り組めるように、教育委員会も支援していきたいと思います。

○市長 小館委員、どうぞ。

○小館委員 モデル的な取り組みとして今行われている状況の中で、それでもやはりALTの配置や指導教員の充当は足りているとは言いがたい状況ではないかと思えます。制度として乗っかっていない状況の中で、あえて四街道市が意欲的にこの取り組みをしていただいているのは、とても意味のあることだと思いますので、この試行が市内全体に広がっていく、あるいは他の地区にも波及していく取り組みになってほしいと思っています。幸い私も授業を拝見した中で、子どもたちがとてもいい表情で意欲的な取り組みがなされていました。それはひとえに指導に当たっている先生方の努力によるところが大きいのではないかと思えます。数人の先生方から聞いたお話では、特に年配の先生方の中には、長く取り組んできた経験だけでは新たな英語の取り組みに適応しきれずに、不安と戸惑いの中でやっている方が多いと聞きました。教員研修や指導者の育成をどうしていくかは非常に大きな問題だと思いますし、その指導者の力量によって子どもの外国語活動や英語教育に関しての興味、関心に差が出てくるのがあってはならないと思います。

幸い四街道市の子どもたちのアンケートの結果を見ますと、この取り組みが大好きだという意見が圧倒的に多く、外国語教育や英語教育に大きな期待感を小学校で醸成していただきながら、中学校につないでいるのは、非常にありがたいことだと思っております。その結果として、英検の合格率が他市にない高さで出ているのは、四街道市のこの教育の取り組みの成果だと思っております。

○市長 小学校、中学校のうちはどうしてもクラス担任というか先生の影響をすごく受けますね。私の経験からいっても、例えば、この先生は数学を教えるのがすごくおもしろいと、数学を好きになってしまって、クラスで数学が好きな子がどんどん多くなります。私の時代で、今はわかりませんが、英語が得意なクラスはその担任の影響が強いような、どうしても子どものうちは先生の影響がすごいですね。その意味では、小館委員から言われた先生のいろいろなキャラクターとか能力によって、子どもたちに格差が生じない状態まで英語を持っていくのは、確かに重要だと思います。先生が英語を嫌い英語を教えていたら、絶対子どもたちは英語好きになれないですね。

○市長 府川教育長職務代理者、どうぞ。

○教育長職務代理者 今、小館委員がおっしゃられたように、行政は小学校の先生方に不安を払拭する機会を意図的にやっていかなければいけないと思えます。これは事務局の仕事だと思えますが、旭中学校区4校、そこの先生方の授業に直接行って見させていただいて、意見やどんな工夫があるかを聞き、そういう場면을意図的に学校サイドと連絡をとりながら計画的につくっていただいて、市内のほかの中学校区の先生方がスムーズに英語に取り組めるように環境構成をしていくことが非常に大事だと思います。要は、教育委員会としてアイデアを出して、学校の先生方と意見交換をし、見て、私たちもできそうだとか、先生方がこうやればいいのだとか、気づきをいっぱい提供することが必要ではないかと、ここ2年間がいい機会だと思います。

○市長 学務課長、何かありますか。急にコメント求めて申し訳ありません。指導課長でもいいですね。

○指導課長 本年も実施していて、説明をさせていただきましたが、各種研修会を実施して、モデル校以外の先生方にモデル校授業参観をして意見交換する会を極力設けているところです。

○市長 どうもありがとうございます。

委員の皆さん、この件に関しまして特に意見等ございますか。いろいろなことを教えていただきました。府川教育長職務代理者から、やはり行政の役割が重要だということ、非常に勉強になりました。これからも引き続き教育委員の皆様方とこういった意見交換をしながら、教育委員会の事務局、予算編成で、今四街道市は財政が大変厳しいですが、教育に関しての予算は将来の四街道市を支えるといえますか、日本を支えていく予算ですので、これについては極力頑張りたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、時間も限られておりますので、協議事項の2番、外国にルーツを持つ児童生徒支援体制につきまして、これを議題とさせていただきます。

四街道市でも、外国にルーツを持つ市民が移り住み、そしてその家族である児童生徒が増加しております。彼らには言葉の問題、生活習慣の違いなどさまざまな問題がありまして、その子どもたちを受け入れている学校も多くの課題があり、校長先生、また担任の先生、教務主任など、大変ご苦労されていると思います。

そこで、本日はその子どもたちへの支援体制として、千葉大学の新倉涼子名誉教授に四街道市における外国にルーツを持つ児童生徒の現状と課題、そして今後の支援のあり方についてお話を伺いたしたいと思います。本日はパワーポイントでご説明いただいて、その後また委員の皆様からご意見をいただきたいと存じます。

それでは、新倉教授、どうぞよろしくお願いいたします。

○新倉教授 千葉大学の新倉です。どうぞよろしくお願いいたします。時間が限られているので、概要等をお話することにとどめさせていただきたいと思いますので、何か質問がありましたら、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。本日はよろしくお願いいたします。

先ほど市長からお話がありましたように、外国の方々が日本にたくさん見えていて、観光で来られる方はオリンピックまでに4,000万人を目標に、現時点で3カ月以上滞在している在留外国人は約250万人です。先ほどお配りした資料の裏側にざっと概要が出ておりますので、どうぞ参考にいただければと思います。東京都や神奈川県、それからブラジルの人たちが多い愛知県などは多いのはわかりますが、千葉県は在留外国人の数が全国6位と意外に多いです。県民人口約600万人のうち外国籍住民が14万人弱、約2.2%が外国の方々です。四街道市は人口が9万3,000人で、在留外国人が、昨年のデータで2,120人で2.2%、千葉県の平均値とほぼ同じです。長期滞在する方たちが、いろいろなビザでいらしております。在留外国人の方々の中には、配偶者、子供を連れてくる、日本で結婚して子供が生まれるといったケースなども多く、外国にルーツを持つ子どもは増えています。私が千葉大に来たのが20年近く前になりますが、1980年代から、こういう形で来られる方が非常に増えてきている状況でした。そのころから外国にルーツを持つ子どもたちの受け入れ対応や教育課題があり、この子どもたちの教育に取り組んできました。

千葉大学の留学生も今60か国ぐらいから来ています。私が千葉大に赴任したころも50カ国以上いましたので、自分の身の回りでは外国の人たちとの直接的接触が多かったのですが、千葉県内、日

本を見渡すと、身近で接する機会が余りない人たちも多いというのが現実ではと思います。

以前行った実態調査、日本に外国人が増えることに関して千葉の住民に質問したことがあります。その結果ですが、「日本に」外国人が増えることが好ましいと回答していた人数に比べ、「千葉に」外国人が増えることが好ましいと回答した数は少なくなり、「自分の家の近所に」外国人が増えることが好ましいと回答する人数はそれ以上に減っていきました。直接的接触が身近に迫ると、歓迎する割合が急に減ってしまうという結果でした。来てほしくないというより、やはり先ほど委員の方がおっしゃっていたように、慣れていないことが一つの原因でもあります。それゆえに、外国にルーツを持つ児童生徒の教育に対応するとき、子どもたちだけに焦点を当てるのではなく、地域住民も含めて、いろいろな形で協力し合っていく体制が望ましいと考えています。タイトルにあるように、包括的という言葉で示されるように、学校教育の中だけで完結するのではなく、いろいろな地域の資源を利用しつつ、彼らの教育体制を整えていくことを四街道市に提案している次第です。

ここでは外国にルーツを持つ子どもと呼んでいます、いろいろな呼び方があります。外国につながる子という場合もあります。今回、私はルーツを持つ子どもと定義しています。ルーツを持つ子どもとは、国籍に関わらず両親どちらかが外国生まれである、外国の人である、外国籍である人たちを指します。この円の中にいる子どもたちはみんなルーツを持つ子どもと考えておまして、教育の対象は外円の全部を指して考えております。外国籍の子ども、親の転勤で来日した子どもたち、お父さんもお母さんも外国人で、日本で仕事をして、子どもは日本の学校に通っている場合は外国籍ですね。それから、国際結婚で生まれた子どもであっても、日本人との間でなければアメリカ等と違って日本は血統主義をとっている、その国で生まれても原則日本国籍はとれません。外国人同士が日本で結婚しても子どもは外国籍です。ところが、日本人との国際結婚で生まれた子どもは、日本国籍をとれます。ですので、外国籍の子どもも、日本国籍で両親のいずれかが外国出身の子どもも外国にルーツを持つ子どもになります。未就学の子どもですが、日本の法律では外国籍の子どもたちは日本の学校に就学する義務を負っていません。ですが、日本は子どもの権利条約を批准しており、日本に来た子どもに関しては就学希望があれば学校が積極的に受け入れております。未就学の子どもに関しては、民生委員の方たちが、昼間に学齢期の子がうろうろしているようだと見つけてくれるなどというケースもたまにあります。また、日本人と結婚したが、役所に出生届を出しておらず、無国籍状態の子どももいるのも現実です。四街道市の中にいるかもしれませんが、私たちはこのような子どもたちも含め、外国にルーツを持つ子どもたちの教育を考えていきたいと思っています。

次に、外国にルーツを持つ子どもの在日のパターンと特徴についてご説明したいと思います。外国にルーツを持つ子どもといっても、いろいろな在日のパターンがあります。子どもの場合は、いつ来たか、どのくらい日本に滞在しているかがとても重要です。このあたりがこれまで学校の先生方に情報として余り伝わっておらず、教員研修等で私もずっと情報提供をしてきました。

例えば表のAさんの場合は、ずっと自分の母国にいて、それで小学校高学年で日本に来ています。また、Bさんの場合は、小学校に入る頃に来ている。Cさんは日本で生まれ育って、ずっと中学、高校まで。それから、Eさんのように、日本に来ては母国に戻り、また日本に来て、また帰って、また日本と行ったり来たりを繰り返している子どもたちもいます。Fさんのように小学校の中学年で来ている子ども、Gさんのように中学校で来る子どももいます。近頃は「呼び寄せ」と称して中学校3年の2学期の、高校受験ぎりぎりまで日本に来る子も結構増えています。それから、Hさんの

ように中学に入るときに来る子、この子の場合には新学期がずれているので、例えばフィリピンの場合は4月ぐらいに終わって5月、6月が夏休みで、9月に日本の学校に入る。場合によっては今年もういいから来年の4月から入れましょと、教育が半年以上空白になってしまうこともあります。そういう子たちも実はいます。

小学校高学年で来た子と、3、4年生で来た子、この2つをとってみても、子どもの発達の観点から学習を進めていく上で重要な違いがあります。私たちもいろいろなケースを指導してきましたが、そこで関わった小学生のケースを紹介します。この子は、来たときには母語をきちんと話せて、母語で書いていましたが、日本の学校に入って3カ月もしないうちに母語を書けなくなりました。では、日本語を3カ月で習得しているかということ、習得できていません。サバイバル的に、「おはようございます」などは言えたとしても、学習言語は身に付いていない。この段階できちんと指導していかないと、思考する言語、要するに学校で勉強していく言語がなくなってしまいます。

それから、中学校で来た子の例です。とても優秀な子で、母語による思考言語ができ上がっていましたので、母語の教科学習言語を日本語に置き換えて教科の日本語を学習することが可能でした。十分ではありませんが、比較的早い段階で授業に行くことができました。

このように、子どもの認知レベル、来日の年齢、親の教育観や親の教育方針は非常に大きな影響を及ぼします。

外国籍の人々の滞在の長期化、定住化が進み、それに伴って就学前、学齢期の子どもが増加しているという話は先ほどいたしました。それだけではなく、親の教育観や環境など、いろいろなことが関わってさまざまなタイプの子どもたちが日本にいます。

ここからは先ほどの話のまとめも入りますが、外国籍の人々が長期化、定住化に伴ってそれに就学前、学齢期の子どもが増加しているという話は先ほどいたしました。学校の現場は実は多国籍化、多言語化している現状です。これまで、在日の朝鮮、韓国、中国の子どもたち、いわゆるオールドカマーの子どもたちが日本の学校現場にいたにも関わらず、皆日本語ができ、日本人と同じ風貌であるがゆえに違いを意識することなくこれまで過ごしてきました。ですが、突然、言葉がしゃべれない、生活様式が違う、自分たちと姿形が違う子どもたちが入り、加えて保護者との意思疎通もままならない現実に直面し、学校現場はとても混乱しています。

私たちも現場に入って先生たちとお話をしますが、とても戸惑っていて、どうやって子どもたちに対応していけばいいかわからない。英語だったら何とかできるでしょうが、ウルドゥー語のパキスタンの子が来てしまった、お父さんは英語を話せない、ウルドゥー語を話せる留学生いますかと大学に依頼が来ます。留学生が通訳として行ってもら場合も単なる機械的な通訳では困るわけで、大学側も、教育通訳という自身の母国の教育制度や日本の教育システムについても理解している通訳として指導してから彼らを送り出していくことをしなくてはなりません。

保護者との教育観の違いにも先生たちは困惑しています。学校に余り行かせていなかったり、雨だと休ませてしまうなど、このような齟齬は聞いたことあるかもしれません。クリスマス休暇で3カ月ぐらい休みをとって母国に帰られてしまうと、子どもの勉強が3カ月あいてしまい、また帰ってきて一からやり直しになるので、先生はとても大変です。現場の先生は保護者に十分説明し、協力を得たいのですが、言葉の問題、価値観の違いからなかなか伝わらないなど、日々苦労しています。そのような現実を補っていく体制整備が不十分です。文部科学省も日本語教育のコーディネーターを配置したり、各市町村でもいろいろな形で日本語指導ができる方たちを配置したりしてくだ

さっていますが、包括的な取り組みが進まないの、毎回先生たちがひとつひとつ個別対応しているのが現実です。ペルシャ語圏の子どもが入学してくるとペルシャ語ができる人をみんなで探し歩くなどしています。

保護者にいろいろなことを伝えようと思ってもなかなか伝わらない、という話はたくさんあり、話すと切りがありませんが、少しだけ。例えば明日は運動会であることを伝えようと、運動会のところだけ英語でフェスティバルと書いて伝えました。すると、お母さんはフェスティバルだから素敵なドレスを着て、高いハイヒールを履いて、アクセサリーをつけてパーティーに行くような格好で来てしまいました。また、明日はお弁当を持ってくる日だったので、ボール紙でおむすびをつくって、折り紙でのりをつくって、お母さんにこれを明日もらってくるようにと子どもに渡しました。次の日、お母さんは先生が作ったのと同じようにボール紙でおむすびを作ってきました。うそみたいな話ですが、そういうことが実際にありました。おもしろおかしく話したりしますが、母親の立場からしてみたら大変なことです。逆の立場で考えてみてください。私たちが他国に行って、どうしていいかわからない状況であれば同じことをするだろうし、心細いと思います。弁当屋さんでお弁当を買って、タッパーに詰めかえていく親もいて、保護者はいろいろなところで戸惑っていることがとても多くあります。先生も保護者もどちらも戸惑っています。

最近では特別支援の境界がわからず、先生たちも見極めがつかないケースが出てきています。文化的な違いなのか、あるいは本当に障害を持っているかもわからない。現場の先生は判断、対応に困ってしまいます。教室にはいろいろな子どもがおり、立ち歩いてうろうろする子ども、外へ出ていってしまう子がいたりする中で、その対応に多くを割かれる先生は、外国の子どもに充分目を向ける余裕がないのも事実です。その結果、外国の子どもがおとなしく静かにして先生の言われたとおりに板書していれば、そのまま素通りしてしまうことも多く、その結果、潜在的な学習力があっても遅れを見過ごしてしまうことがあったりします。先生を非難しているわけではなく、現場はそれくらい大変だということです。

いくつかの機関、団体と連携の取り組みをしている各市町村はありますが、いくつか複数の部署で連携するなどにとどまっており、市全体として包括的な取り組みとして新しい教育体系として打ち出しているところは見当たりません。四街道市は、世帯数はほかの市町村と比べて多くないですが、モデルケースとして新たな教育システムの構築を試みる上でわかりやすいのではと思います。

日本の子どもは今、国や文化を超えて、境界を越えて、多様な他者と関わっていける力が求められています。外国にルーツを持つ子どもたちを含めたすべての子どもたちにそういう力を育てていこうとする学校を社会全体で、地域社会が一体となって支援していく必要があります。学校だけに任せるのではなく、地域社会が持っている人的、物理的資源をみんなで共有して、一つにまとめて、子どもたちの支援をしていくことがとても大切だと思います。外国人児童生徒の教育を支える地域社会の包括的、有機的連携という表題はそのことを意味するものです。

私は、外国にルーツを持つ子どもたちに関して学校の先生たちに研修をしましたが、初期の頃、先生たちから、不登校がいたり校内暴力があったりと、日本人の子だって大変なのに、数%の外国人の子どもに何でそんなに力を入れるのですかと言われたことがありました。

私はそのときに、これは日本の子どもにとっても貴重な教育の環境を提供できる機会であると答えました。いろいろな背景の子どもが共存する体験は、日本の中で、ずっと日本人だけで育ってきた子どもたちに対応力、共感力を育てるいい機会です。2つ、あるいは3つの言語や文化を持って

いる存在はとても貴重です。2つ言語を話せる子、3つ言語を話せる子が育つ環境があるのに育てないのは非常にもったいない。他国を見ていると、例えばアメリカのシステムが全ていいとは思いませんが、韓国と交渉するときはコリアンアメリカンがトップとして行くことがあります。要するに、彼らのもつ異文化交渉能力をちゃんと育て、きちんと使っていくところは見習うべきではと思います。このような私の考え方は実利的かもしれませんが、そういう子どもたちがちゃんと育っていったら、日本にきちんと共感性、親和性を持って日本に所属してもらえれば、日本にとってもいいことだと思います。そういう潜在能力を持った子をきちんと育てていくことが大切だと思います。

外国にルーツを持つ子どもと一緒に育つ日本人の子どもにとって、さまざまな文化、いろいろな言語を持ち、かつ自分と全然違う価値観を持つクラスメートの間で相手に共感することや、折り合っていく力をつけていく環境は貴重です。トラブルもあるかもしれませんが、いろいろなことがあります。その中で、日本人の子どもがそれを乗り越えてまとめていく力や、共感できる力を育てていくいい機会です。外国の人たちをややもすると敬遠しがちになりますが、好む好まざるに関わらずきちんと日本人が彼らを受け入れられるかは、日本社会の成熟度にかかっていると思います。成熟した社会を作ることができる子どもたちを育てていく、そのための基礎作りを教育が行うだろうと思います。そういう意味で、この子達を支援するには、もちろんこの子たちのためでもありますが、日本人の子どもたちの異文化適応能力を育てていく機会でもあると思っていただきたいと思います。その中で、先ほど先生方の力量とおっしゃられましたが、やはり先生がそれにどう取り組むか、先生の力がとても大きいと思います。

これまで述べてきた課題を念頭に、以下千葉大学ICSセンターとの連携内容についてご説明したいと思います。

千葉大学のインターカルチュラル・スタディセンターですが、国際未来教育機関の中にあるセンターです。このセンターは異文化間教育に特化した、インターカルチュラル・マインドを育成するところです。基本的に地域と密着して、私たちが持っているこれまでの研究成果や実践の成果などを提供していくところです。先ほどお話しした異文化適応の資質を育てていくためのプログラムを提供していくところです。基本的に地域と密着して、私たちが持っているこれまでの研究成果や実践の成果などを提供していきます。これまで、外国にルーツを持つ児童生徒に関する研究や実践を行ってきましたが、それらの成果を四街道市に提供したいと考えております。ポンチ絵に示す通りですが、その具体的な内容として、学校に入るときのサポートがあります。先ほどウルドゥー語の話を出しましたが、突然パキスタンの子が来ました。親も言葉がわかりません。学校の依頼に送った学生を送ったケースですが、アセスメントの仕方、それに基づく指導計画の作成、具体的指導へのアドバイス、保護者への具体的支援などについて指導・助言を行います。

その際、保護者支援が一番大切なので、先ほどの言語を話す留学生をチームに加えます。単に外国語ができる学生を送っているわけではありません。チームのメンバーとしてのオリエンテーションを得てから送ります。日本人のやり方では通用しないこともありますから、そこは留学生に任せます。教育通訳と私は呼んでいますが、そういう人を育てていくこと、今は千葉大学が賄っていますが、本当でしたら四街道市に住んでいる適任の外国の人がいると思いますので、これからそういう人達を発掘したいと思っています。初期指導が終了した後も、学校・教師へのサポートも継続していきます。

現状の保護者支援は往々にして、保護者向けに最初にオリエンテーションを1回やって、持ち物

はこれを用意してくださいと伝えて終わりですが、1回ではわからないことが多すぎます。保護者に学校のしくみやルールを理解してもらう上でも継続的なオリエンテーションが必要です。保護者が学校にきちんとコミットしてもらうような関係を作るために私たちがサポートしていきます。多分、学校としては初めての経験になると思いますので、ここは協働でやっていきたいと思います。通訳だけをぽんと投げるようなことはしません。それから、教師のエンパワーメントで教員研修の話が出ましたが、まだまだ足りていない状況なので、教員研修を重視していきたいと思います。

それから、新しく教育スペシャリスト、多文化教育スーパーバイザーの育成ですが、コーディネーターやスーパーバイザーに民間の人を入れるケースが多いですが、私は教育に関わる教師にやってほしいと思っています。例えば、教務主任やこれから管理職になっていく人など、教育委員会の指導主事などになっていただきたいと思っています。指導主事の先生方においても、例えば理科教育専門や国語教育専門などのスペシャリストであっても、グローバル化に対応した教員研修の方向性や内容に精通していないことも多く、自身の専門と同時にこの領域にも精通しているスペシャリストを育てていくことの大切さを感じています。

時間がなくなってきましたが、教育通訳について事例を一つ。子どもが6年生になり、中学の入学説明会がありました。母親と一緒にきてくれたことを子どもはとても嬉しがるのですが、お母さんは日本語が全然わかりません。説明会は全部日本語ですから、お母さんはずっと座っているだけになってしまいました。そうすると、お母さんは自分の国の教育制度を思い浮かべます。そこで、中学に行ければ高校は自動的に行けると、自国の教育制度に照らして、これで子どもは高校まで行けると思い込んでいました。親が日本の教育制度を理解していないためにこのような誤解が生じてしまいました。そこで、四街道市との連携プログラムでは、教育通訳を入れ、親に説明する機会を提供していきます。

千葉大学ICSセンターは、教育委員会と各部署で連携してプロジェクトチームを立ち上げていきますが、日本語指導の問題、進路指導、教科指導、保護者へのサポート、教員研修、地域コーディネート、多文化教育相談など、いろいろなテーマがあります。これを教育委員会と各部署で連携して、そのような問題に対して一つ一つ順次実施していくことができればと思っています。

教育委員会は小学校、中学校の教育課題、それ以外、幼児教育、高校の教育に関する課題もあります。また、保護者も日本で働いているわけであり、勤務先の理解、外国人の住民のコミュニティーもあると思いますので、そこへのアプローチも必要だと思います。また、地域ボランティアによる日本語支援、日本人保護者と外国人保護者の他にコミュニケーションがないので、さまざまな形でボランティアの方が学校と連携して行っているそうですので、この辺りもきちんと包括的にみんなで協力し合っていきたいと思います。

ノウハウも含めて、このプロジェクトチームの中でまずできるところから、1つは学校の先生に負担を余りかけず、今あるプログラムをうまく差し換えたりすることも含めて、彼らが少し安心して子どもの指導に当たれるサポート体制を構築していく。地域の中にいろいろなノウハウを持っている方がいらっしゃるので、知恵と協力を得ながら、学校を支援していくことを考えています。もちろん大学もサポートしていきます。余りがちがちに締めず、無理なく皆で気持ち良く協力体制が作れるようやっていければ、これが他市町村のモデルになると思います。課題もたくさんありますが、できるところから方向性、理念を一つにしてやっていければと思います。

すみません、話が長くなりましたが、以上です。

○市長 新倉先生、どうもありがとうございました。
教育長、今のお話に補足的に何かございますか。

○教育長 四街道市は外国籍の児童生徒がかなり在学しております。平成24年度ではたしか59名でしたが、平成30年度は151名で、六、七年間で100名ほど増えている状況です。今後教育委員会はさらに増えていくだろうと予想しております。現在は、外国籍の子どもだからといって、生徒指導上の問題があるわけではありません。それは表に出ていない状況であり、潜在的に日本の文化になじめない子ども、日本の学校で、四街道市の学校で疎外感を持っている子どもが恐らくいるのではないかと予想しております。具体的に把握しているわけではありませんが、そのように考えています。やはり外国籍の児童生徒も学校にとって大切な子どもたちですので、国籍を問わず子どもたちが未来に希望を持って、それで自分たちを見詰めながら、仲間と共に成長していく環境が重要だと思っていますので、今先生がお話になったように、日本の子どもたちのグローバル化も含めて、他の文化を持つ人とコミュニケーションを図る上で重要かと思えます。

子どもたちが、四街道市を自分のふるさととして愛着をもって育っていく、四街道市のためにも、日本のためにも重要だと思っています。保護者なども、表面的には出てきておりませんが、不安を持って戸惑いながら日本の学校に子どもたちを送っているのではないかと考えております。国籍に関係なく、子どもは国の宝ですので、今先生がお話しされたようなことが必要だと感じております。
以上です。

○市長 それでは、各教育委員さん、それぞれご質問やご意見いただきたいと思いますが、何かございますか。
どうぞ。

○小館委員 新倉先生のご説明を、これから素晴らしい取り組みがなされていくのだと大きな期待を抱きながらうかがっておりました。私の認識の中に、子どもたちの国際化・グローバル化に対応するには英語教育を進めたり、国際理解教育を行ったりすることという狭い視点にとどまりがちな面があり、本市にも2.2%を占めている外国にルーツを持つ子どもたちへの視点や思いをめぐらすことが欠けていたと気づかされました。

様々な事情で日本に、四街道市に生活することになった親や子は、抱える悩みや問題は個々千差万別ですし、これを支える関係者の皆さんも、何とか力になってあげたくてもどこに相談したら解決につながるのか深い悩みの中にあるのが現実ではないかと思えます。場合によっては相互の誤解や理解不足によって、国際理解とは真逆の関係になってしまったり、子どもの可能性が伸ばせない状況になっていたりすることも多いかも知れません。

今、先生がご説明くださったような、四街道市に担当者をおき、包括的で全体的な視野を持ってこの問題に対応することは、単にこの2.2%の方たちへの対応では済みません。本市には有能な教師や経験豊かな市民も大勢います。多くの皆さんの力と知恵で協力連携し、結果として全ての児童生徒が互いの違いを乗り越え共感する心情が育ったり、四街道市全体の国際化を進展させたりするためにも私はぜひこれを推進していただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

○市長 何かありますか。

○新倉教授 私たちがこのICSセンターで強調しているのは、心の教育です。成果が目に見えにくい面、そこに信念を持ってやっていかないと。育っているかどうかはやはり自分たちがきちんとしたプログラムを提供し、そしてそれを積み重ねていくことしかないと思います。もしかしたら10年後、20年後か。子どもたちは将来いろいろな形でいろいろな人と接していくでしょうが、共感力と洞察力を持ち、多様性の中で生き抜く彼らの力の基礎を創ることが大切だと思っています。

○教育長 保護者同士の交流は、さっきおっしゃられたように、余り活発ではありません。日本人同士、外国籍同士はありますが、その垣根を飛び越えての交流は比較的少ないようです。それと同時に、地域の中での交流も余りないかと思えます。そこで、交流がないと生まれてくるのが、私は偏見ではないかと思えます。例えばマスコミの報道などを通して日本の中にもイスラム教に対する偏見があるように思いますが、学校の中で見ると、イスラムの方々は約束を守ります。うそはつきません。そういう実態があります。つき合ってみると、やはり同じ人間なのだとよくわかると思えます。知らず知らずのうちに、自分では意識していない偏見がやはりそれぞれの心の中に生まれてくるのではないかと思えますが、交流を通して偏見が解消していくのではないかと。これは子どもたちのほうが垣根は低いです。

です。ですので、それこそ子どもたちを通して、大人の偏見を解消していくことも、一つ効果として挙げられるのではないかと思えます。やはり一番怖いのは報道されているようなイスラム原理主義のテロリストたちと同一視するような偏見が生まれることが、四街道市民同士の亀裂を産んでしまうことになりかねないことだと思えます。教育を通して、グローバルな、本当に言葉だけではなくて心のグローバル化が必要だと感じております。

以上です。

○市長 ほかに皆さん、ご意見ございますか。

田中委員、どうぞ。

○田中委員 今、教育長がお話なさっていましたが、私の娘は中学3年生で、同じクラスにやはり外国籍の子がいます。その子は、もう日本に来て何年か経ち、とても賢い子で日本語については習得ができております。ただ、全然問題はないと思えますが、やはり生活習慣が違うので、子どもたちが話す事や、何かの行事のときに、担任の先生が保護者に伝えたいことを学校から保護者に伝えるのではなく、そのお子さんを通じておかあさんに言ってもらう形で伝えていました。保護者間で連携がとれるのであれば、話ができると思えますが、そのお母さんが学校に来ることは、この3年間で一度もなかったもので、そういうところからサポートしていただけるのであれば、ぜひこのシステムを導入していただきたいし、子どもたちも多分その子もサポートをしてもらうことによって一つの不安材料が消えるかと思えますので、ぜひともお願いしたいと思っております。

○市長 新倉先生、千葉大学のICSセンター、インターカルチャーズ・スタディーセンターですね、その機能がこの左側にありますが、右側が四街道市役所であり、四街道市の地域社会ですね。

その間を結ぶに当たっては、これから千葉大と四街道市が意見交換や議論をして、スタート地点で包括的な、有機的な活動を行うための協定のような形に発展させてから動いていくと思いますが、この千葉大学のICSセンターが例えば千葉県内のどこかの市と実際に何か事業を進めている事例はあるのですか。

○**新倉教授** ありません。

○**市長** 初めて、最初の事例になるのですね。

○**新倉教授** どこかの部署、組織と連携することはありましたが、市の包括的取り組みとしてはなかなか上がりませんでした。今回、四街道市でまず市長がこれをやりましょう、検討しましょうとおっしゃってくださり、それから教育長との連携があつてご理解をいただけたところで検討がはじまりました。私たちは個別プログラムはいろいろなところでやっています。それは個別の指導や研修です。スーパーバイザーの育成は、連携の新たな取り組みの一つです。

○**市長** 何年か前に大日小学校に新倉先生の教え子のペルシャ語のALTの方がいらっしゃってましたね。その方もこのICSセンターの活動だったのですか。

○**新倉教授** 実は、このセンターは出来上がって間もないです。国際未来教育機関の中のセンターになっていますが、このセンターの活動として送られたわけではありません。また、ISDという留学生サポートディスクがありますが、彼女の場合はそこを通してではなく、誰かの紹介という形です。今年、彼女の後任を探してほしいと大学内の複数の人に問い合わせがありました。依頼を頼まれたそれぞれが他に頼まれた人がいることを知らず四方八方手を尽くしてみんな個々に探していました。これは非効率な探し方です。また、いつもペルシャ語の話せる人がいるわけではなく、世界は流動的で日々ドラスティックに変化しています。今後また違う言語の要望が必ず出てきます。違う言語が出てきたときに、いないからできないではなく、そこで知恵を使ってやる方法を考え、代替案をきちんと確立しないといけません。一度に全部はできませんが、今回その仕組みがうまくできれば、もう少し学校も戸惑わなくて済むと思います。

○**市長** 四街道市の場合は、地域コミュニティーの地域ボランティアの中核と言いますか、中心が国際交流協会ですね。また四街道市の場合は、市内に八十幾つの自治会がありますが、例えば外国の方が自治会の副会長や班長になるところまでは行っていません。他県の他市などでは、実際、会長までは行ってないかどうかわかりませんが、外国の方々のコミュニティーが日本の自治会と融合して自治会の役員までやっているところもあります。四街道市はそこまでいきませんが、地域ボランティアは国際交流協会などが中心になってやっていただいている状況です。一つの有機的なシステムが何かできるとすばらしいと思います。

○**新倉教授** 一気に外国の方が自治会長というのはハードルが高いかもしれません。なので、地域の住民の意識の変化と、地域に外国住民を取り組む作業がまず必要だと思います。やはり気持ちが

ついてこないと、なかなか難しいです。

○市長 多文化教育スーパーバイザーですが、その育成は千葉大に行って研修を受けるのですか。

○新倉教授 このプログラムでは、スーパーバイザーの養成を1回、2回の研修ではなくシリーズで受けていただいて、先ほどお話したような問題に関して多角的な知識を身に付けていただく形になります。多文化スーパーバイザーは、その方が全てをやるのではなく、統括が主な役割です。教育畑の方がその指導的な役割を果たしていただくことが狙いです。

○市長 先ほど、多文化教育スーパーバイザーのところで、これまで民間の地域ボランティアの方々などになっていただいた事例もあるが、四街道市の場合は例えば指導主事の先生とか、本当に専門的なスーパーバイザーとして育成できればとおっしゃられましたが、教育長、四街道市に指導主事で来られて教育委員会にいる先生は大体何年ぐらいいらっしゃるのですか。

○教育長 今までは大体3年、一番長い人で8年。

○市長 8年もいらっしゃいますか。

○教育長 ですから、もしこの多文化教育スーパーバイザーを担うことを想定すると、若いうちから入ってもらい、何年かやってもらって研修を受けてもらうことが必要かと思います。3年ではこれはできないですね。

○市長 せっかくスーパーバイザーでスペシャリストとして千葉大に授業を受けに行くのでしょから、やはり地元で10年ぐらいその成果を発揮してもらいたいですね。でも10年したら異動してしまって、また次のスーパーバイザーを育成するのは大変かと。

○新倉教授 ですから、複数人を徐々に育てていくと考えればいいと思います。1人で担うのは難しいので、実際に研修を受け、育ってきた先生たちを適宜配置していく。仮にその先生が異動したとしても今度は異動した地域、学校でこの考え方を広げてもらえれば、学校現場の先生たちの戸惑いも少なくなります。今見ていると、現場の対応は個人の力量に任せられていることが多いようです。上に立つ人にはこの領域に精通していただき、現場の統括を行っていただきたいです。統括する管理職、指導主事等が多文化スーパーバイザーとしても資質を磨き、現場の先生方への指導にあたってほしい、そしてそのような資質のある人たちがどんどん育ってくればありがたいです。

○教育長 アイデアとしては、スーパーバイザーは教育委員会の指導主事でよいかと思いますが、しかし、そのスーパーバイザーになれる人材を現場で育てていくシステムが必要かと感じます。

○新倉教授 そうですね。

○教育長職務代理者 プログラムの研修ですが、1つのプログラムを身につけるのに、例えば5回やる、8回やるなどスーパーバイザーを育成していくために千葉大学での研修は年間何回ぐらいやっているのですか。

○新倉教授 今回はじめての試みですので、期間は少し短くてもいいかもしれません。ですが、本当に任せていく人であれば、じっくりやっついていかないといけないので、個々の人たちであれば半年ないし1年くらいかと思います。

○教育長職務代理者 わかりました。

○教育長 例えば夏休みに、スーパーバイザーの予備的という失礼ですが、夏休みに集中して講義や研修を受けることも必要かと思えます。

○新倉教授 そうですね。今まで研修していると、本当に優秀な先生方は短期間でも核心のところはきちんと受け取って、わかってくれたと思う方が結構いらっしゃいました。長くやればいいものでもないで、ポイントをきちんと抑えてくださる方は如実にいらっしゃいました。

○市長 「包括的な」という観点からいくと、例えば外国籍の外国にルーツを持つ子どもでも、日本で生まれれば健康こども部の健康増進課で当然母子手帳を出しますし、生まれれば健診を受けます。生まれた後、3歳6カ月健診まではちゃんとプログラムがあり、そのとおりにやっています。3歳6カ月健診のときに、その子は健診に来ませんでした。来ないときは、来ない理由を健康こども部でもいろいろ探します。つまり、まだ日本にいるか、いないか。来ない子の多くは、自分の国に親と一緒に帰ってしまっていて、出入国の状況を調べる、また健康こども部だと、今保育所にも外国のお子さんたちがいらっしゃいますし、環境経済部だとごみの出し方、分別ですが、これは地域の中で自治会でのトラブルの元です。やはり地域コミュニティー、外国の方と自治会が融合していくためにも、毎日のごみの出し方をはじめ、細かい面まで、包括的な対応が必要になります。今日初めて議論になりましたことから、これからいろいろ詰めていって、こういう形で千葉大と連携、協力を進める形で、新倉先生を窓口として市も進めさせていただきたいと思っていますが、いかがですか。

○新倉教授 各部署の方も、やはりとても大変です。日ごろ私も市民課や福祉課などの窓口に行きつらる方とお話ししますが、とても大変です。大変だからこそ知恵の出し方が問われているのだと思います。これやっただめだったら、あれやってみようとか、このことについてみんなで知恵を出せるような組織になっていくといいと思います。異文化との接触には摩擦もありますし、いろいろなところでうまくいかないことが現実です。きれいごとでは済まないことも現実なので、その現実を少しでも乗り越えていくことを前提に、みんなで協力して、四街道市の取り組みを皆さんが見習っていくような形になっていくいいと思っています。

○市長 どうもありがとうございます。もう12時を回ってしまいましたので、今日スタートして、ぜひ教育委員の皆様方、これからもいろいろなご意見、アイデアをいただいて進めて参りたいと思います。やはり外国にルーツを持つ児童生徒の支援体制を充実させていくことは、一日も早く日本、そして四街道市の生活に慣れてもらわなければいけない。子どもたちはどんどん慣れていきますが、なかなか保護者までいかないのが現実でありますし、また、小中学校においても校長先生、それから担任の先生の負担が非常に大きくなっていますので、この負担軽減にもつながればと思います。そして日本の中で児童生徒の異文化適応能力が高まっていくのは非常に重要だと思います。これは子どもたちの異文化適応能力が高まれば親も高まるのではないかと。私などは、異文化適応能力が低いので、年に1回姉妹都市リバモアの方が訪問される時に、英語をしゃべれないからなかなか適応できず、いつも国際交流協会の皆さんにお世話になって、ありがとうございます。

これからも皆様とともにこの千葉大との連携を深めた中で、事業を一体化していきたいと思えます。未長くどうぞよろしく願いいたします。

それでは、協議事項のその他ですが、委員の皆様方、何かございますか。よろしいですか。

事務局も特にないですか。

では、本当に本日はありがとうございました。充実した議論、意見交換ができたと思います。新倉先生、これからもどうぞよろしく願いいたします。

閉会宣言

市長

○市長 それでは、これにて平成30年度第1回の四街道市総合教育会議を終了いたします。

ありがとうございました。

○教育部長 皆様、ありがとうございました。新倉先生、ありがとうございました。市長におかれましては、進行ご苦労様でした。

本日の日程は全て終了となります。

署 名

四 街 道 市 長

佐渡 齊

四街道市教育委員会教育部長

荻野 武夫
